

チモシー新品種「シリウス」の特性と利用法

1. はじめに

当社育成のチモシー新品種「ホライズン(早生)」と「シリウス(晩生)」は平成14年に北海道優良品種に認定され、その後、普及センターなどのご協力による試作展開や少量販売を行ってまいりました。販売用種子に関しては、順調に種子増殖され、あわせて、農林水産省品種登録も完了し、今春から本格販売が可能となりました。本稿では晩生新品種「シリウス」の特性と利用法についてご紹介したいと思います。

2. シリウス育成のポイント

チモシーは当初、早生の熟期が主体でしたが、昭和60年代から刈り取り適期の拡大を目的として、中生品種の普及が広まり、現在ではチモシーの需要のおよそ4割を中生品種が占めております。当社では、中生品種「ホクセン」、「ホクエイ」を育種しましたが、その後、更に晩生の品種を開発すべく育種を継続しました。シリウスは主に当社北海道研究農場がある長沼町において育種されましたが、広域適応性品種の開発を目的として、十勝の芽室町で有望栄養系の後代検定を行い、構成母株の決定に役立てました。また、冷涼多湿な条件で多発する斑点病に対する抵抗性を付与するため、斑点病幼苗選抜の手法も開発に役立てております。

3. シリウスの特性と利用方法

1) シリウスの出穂始

出穂始はホクシュウとほぼ同じ晩生であり(図1)、道央・道南では6月20~25日、十勝・北見では6月25日前後、天北では6月28日前後、根釧では6月末から7月上旬にかけて出穂が始まります。シリウスは出穂が遅い品種であるため、遅刈りとなる草地や7月に刈り取る乾草栽培草地での利用に適しております。

| 出穂始 月日 | 6/7 | 6/13 | 6/15 | 6/17 | 6/22 | 6/25 |
|------------------|-----|-----------------------|------------------|------------------|------------------|--|
| ク ン ブ ウ | | ホ ラ イ ズ ン | ノ サ ツ ブ | ホ ク セ イ | ホ ク エ イ | キ リ タ ツ ブ シ リ ウ ス ホ ク シ ユ ウ |

図1. 出穂始めの全道平均(道内6試験場、2カ年の平均値)
注)ホクセイ、ホクエイは推定値

2) シリウスの草型

シリウスとホクシュウは草型が若干異なります。シリウスは直立型で茎が太く、主に採草利用に適するのに対し、ホクシュウはやや開帳型で茎が細く、茎数が多いため、主に放牧利用に適しております。シリウスは主に採草利用に適しておりますが、放牧利用の適性を確認するため、当社北海道研究農場において多回刈

り条件による擬似放牧試験を行なったところ、ホクシュウと同程度の季節生産性と収量性を得ることができました。当社では採草利用だけでなく、放牧や兼用利用も可能と判断しております。

3) シリウスの収量性

シリウスは特に1番草が多収となります(図2)。その反面、1番草刈り取り後の再生力がやや緩慢であり、2番草収量はホクシュウや中生品種と比較するとやや低収となりますが、年間1回刈りとなる草地の場合は、翌春の枯れ草が少なくなるというメリットがあります。

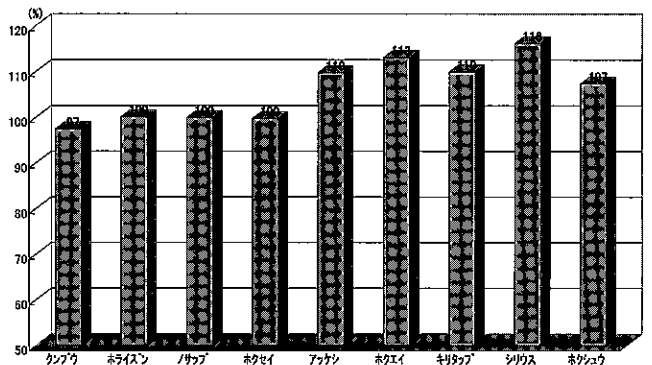


図2. 1番草乾物収量の品種間差(雪印種苗(株)北海道研究農場)

4) 斑点病抵抗性

チモシー斑点病は冷涼多湿地域で多く発生し、北海道では根釧地域や海岸部などで多く発生する重要病害です。また、窒素肥料の不足が病害の発生を助長と言われており、特に草地更新後の初期生育段階で罹病が甚大な場合は、葉先から巻き込むように枯れ、枯死に至る場合があります。

シリウスの構成母株の一部は選抜段階において、幼苗に斑点病菌を接種し、高い抵抗性の個体を選抜する幼苗選抜を経ております。また、シリウスはホクシュウよりも斑点病抵抗性に優れていることが道内試験場で確認されております。

5) 混播設計

シリウスは再生力が緩慢であるため、マメ科と混播する場合は、2番草の生育が旺盛なアカクロバやアルファルファとの混播は避け、競合力が穏やかな小葉型シロクロバ「リベンデル」と混播することをお奨めいたします。

(北海道研究農場 谷津)

雪印種苗株式会社

編集発行人 長尾 漱

本社004-8531札幌市厚別区上野幌1条5丁目1番8号

TEL (011)891-5911

FAX (011)891-5774